法政大学学術機関リポジトリ
HOSEI UNIVERSITY REPOSITORY

PDF issue: 2025-07-03

スエービーとアレマンネン : 中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景(1)

IWAYA, Michio / 岩谷, 道夫

(出版者 / Publisher)
法政大学キャリアデザイン学部
(雑誌名 / Journal or Publication Title)
法政大学キャリアデザイン学部紀要 / 法政大学キャリアデザイン学部紀要
(巻 / Volume)
1
(開始ページ / Start Page)
143
(終了ページ / End Page)
169
(発行年 / Year)
2004-03
(URL)
https://doi.org/10.15002/00003246

Hosei University Repository

スエービーとアレマンネン
—中世初期アングロ・サクソン諸王国の民族的背景（1）—

法政大学キャリアデザイン学部教授　岩　谷　道　夫

(一)

英語は，英国民，所謂アングロ・サクソンの形成過程にその起源を持っている。英国民が構成されるに至る歴史的過程の発端となった出来事は，ゲルマン民族のうち，北海沿岸に居住していたゲルマン人諸部族，とりわけアングル，サクソン，そしてジュートの，西暦5世紀半ば以降における，ブリテン島への移住である[1]。それらのゲルマン人諸部族の移住には，同じゲルマン人部族のフリージアンも参加したという説も存在するが[2]，いずれにせよ，北海沿岸に居住していたいくつかのゲルマン人諸部族の，ゲルマン民族の大移動の時期における，ブリテン島への移住により，英国民が形成され，英語が成立したのであった。それではそのブリテン島に移住して，英語を成立させたアングル，サクソン，ジュート，さらにはフリージアンとはどのような人々であり，どのような歴史を持っているのであろうか。それを知るためには，アングル，サクソン，ジュート，そしてフリージアンの，ブリテン島への移住以前の歴史，つまりゲルマン民族諸部族の歴史を，遡及的に追究する必要があるであろう。それらのゲルマン人諸部族は，それぞれ部族国家を創り，ある場合には独立し，ある場合にはゆるやかな連合を作りながら生活し続けていた。その中で，アングル他のゲルマン人部族は，より大きなスエービーという部族国家の連合体を作っていたことが知られている。そしてそのスエービーは，ゲルマン民族の大移動の頃には，個別的な部族名となっていたが，その個別的な部族名としてのスエービーが現われる過程で，スエービーと密接な関係を持つと思われるアレマ

Hosei University Repository

ンネンが登場する。そこで本稿では，アングル他のゲルマン人諸部族と深い関係を持っていた連合部族としてのスエービー，そしてそのスエービーが単一部族となってゆく過程で現われるアレマンネンという，二つの部族に焦点をあて，その二つの部族の成立，構成がどのようなものであったか，その実体を把握することにしたい。英語を創ることになったゲルマン人諸部族のアングル，サクソン，ジュート，フリージアンが，ブリテン島に渡る以前，どのような状況にあったのか，そして，それらの諸部族と同じゲルマン民族に属し，共通の社会構造を持っていた他のゲルマン人諸部族は，どのような状況にあったのか。それを考えることは，アングロ・サクソン民族を，そして英語の成立過程を知るための，一つの重要な手続きであると思われるからである。

(二)

古い時代のゲルマン民族について記されている文献の大部分は，ギリシア人やローマ人歴史家によるものであるが，その中で最も重要な文献と見なされ得るのは，紀元前50年頃のカエサルの『ガリア戦記』[3] と，紀元100年頃のタキトゥスの『ゲルマーニア』[4] である。前者は，ローマ軍によるガリア遠征時の戦闘について，カエサルが自ら執筆した戦記であり，ローマにとって北方の侵入者であったケルト人との戦闘についての，克明で具体的な実際の記録である。内容は，ケルト人との戦闘に関する記録がその大半を占めているが，その中に，アリオウィストスを首長とする，ゲルマン人部族スエービーについての，極めて具体的な記述が含まれている。様々な観点から見て，その文献の重要性は，計り知れないほどであるが，ゲルマン人全般についての資料という観点からすれば，その記述は，もともとケルト人との戦いの記録であるので，限定的な評価がなされてきたけれども。一方，タキトゥスの『ゲルマーニア』は，カエサルの『ガリア戦記』からおよそ150年後の，西暦紀元100年頃のゲルマン人部族に関する記録である。カエサルの記録とは異なり，タキトゥスの『ゲルマーニア』は，全般的に本人の実体験によるものではなく，ゲルマン人の諸部族を訪れた複数の人々の報告に基づいている。しかしながら，それは，西暦100年頃のゲルマン人諸部族についての，極めて詳細な，また体系的な記録となって

Hosei University Repository

いる。それまでにも様々な歴史家によって，ゲルマン人諸部族に関する記述がなされてきたけれども，タキトゥスの「ゲルマーニア」においてほど，ゲルマン人諸部族の生活・風習を中心とした政治的，文化的，社会的全体構造が，体系的，網羅的に記された文献は存在しない。

前述のように，タキトゥスの「ゲルマーニア」は，ゲルマン人諸部族についての文献のうちで，最も体系的で詳しい内容を持ち，それ故，ゲルマン人についての文献の歴史を画期するものである。一方カエサルの「ガリア戦記」は，カエサル自身の実体験に基づく具体的な記録であり，言及されているゲルマン人は少数であるかも知れないが，その少数のゲルマン人に関する記録としては，最も信頼に値する資料と言えるであろう。これまで「ガリア戦記」は，その戦時における記述という側面が強調され過ぎて，ゲルマン人社会に関する一般的記述としては，タキトゥスの「ゲルマーニア」と比べ，史料としては過小評価されてきた。それに対し堀米庸三氏は，ケチュケの言葉を引用し，リュトゲやウェーバーによる，「ガリア戦記」における史料的価値の再評価の正当性を強調している[5]。つまり「ガリア戦記」は，戦時の記述であるが故に平時の記述としての価値を持たないのではなく，その戦時の記述を通して，平時の構造も対極的に推測し得るのであり，またゲルマン人社会とケルト人社会との比較という観点も，極めて重要なものがあるのである。

「ガリア戦記」は，その表題が示すように，ローマの北方に居住していたガリアのケルト人に対する戦闘の記録である。当時のローマ人にとっては，日常的な北方の敵は，ガリアのケルト人であり，「ガリア戦記」の中の大部分は，当然のことながら，ローマ軍とケルト人の軍隊との実際の戦闘の記録になっている。しかしながらその中に，ゲルマン民族の一部族であるスエービーについての，極めて具体的な記述が含まれている[6]。そして「ガリア戦記」は，そのスエービーについての精細克明な記述の故に，ゲルマン人に関する文献として比類のない価値を持っていると言うことができる。一方スエービーは，タキトゥスの「ゲルマーニア」にも現われ，ゲルマン人部族の相当部分を占める大部族として詳しく記されている[7]。ここでそのスエービーの歴史について概観してみたい[8]。

スエービーは，西暦紀元以前から既に，エルベ川の下流および中流域に居住

Hosei University Repository

していて，そこから南方へ移住することになる。そして時代は異なるが，二つの方向に向かう。一つはエルベ川を上流に向かい，支流のザーレ川に沿って上流に進む；そしてテューリンゲンを経て，ヘッセンを通過し，ライン川沿岸地域に達する；さらにライン川を上流に向かい，マインツまで到達し，そこを拠点にドイツ南西部に定住する。もう一つはエルベ川に沿って上流へ向かい南下するが，ザーレ川に分かれる地点で，さらに本流のエルベ川に沿って進み，結局エルベ川がモルタヴ川と名前を変えるボヘミアの平原まで到達し，そこを拠点として定住する[9]。

前者のスエービーが，カエサルの出会った，アリオウィストスを首長とする，ライン川一帯のスエービーである。そのスエービーは，カエサルに敗北した後，しばらくゲルマーニアの地に留まり，その後同じスエービーの中核部族のセムノーネースを中心に形成されたアレマンネンに参加する。また，そのアレマンネンの部族形成に参画しなかったスエービーは，ゲルマン民族の大移動の時期に西に向かい，スペインでスエービー王国を造るが，やがてそこでその国家は滅亡する。アレマンネンの部族形成に参加したスエービーは，その後フランク王国に併合される。しかしドイツ南西部の地域にスエービーの名前を残し，シュヴァーベンと呼ばれるようになる

一方，スエービーのうち，カエサルとの戦闘で敗北した南部の主力部分は，東へ向かい，ボヘミアへ移住する。そしてその後しばらくボヘミアに留まっていたが，ゲルマン民族大移動を契機に，ボヘミアの他のゲルマン人諸部族を統合しながら移動を始め，6世紀頃までに，以前マルコマンネン人が居住していたドイツ南東部から，オーストリア一帯へ移住する。そしてその頃までに，バイエルンと呼ばれるようになるのである。

前述のように，カエサルがライン川流域で出会うことになったスエービーは，その首長アリオウィストスを中心としたものであった。『ガリア戦記』のスエービーについての記述は，主にその前半に見出され，それは，アリオウィストスを中心とするスエービーの軍隊が，カエサルの軍隊と戦い，敗北する部分である[10]。そこではスエービーが，カエサルのガリア遠征当時，つまり紀元前50年頃のゲルマン人部族の中で，主導的な立場を占めていた様子が伝えられている。そのスエービーは，後のタキトゥスに現われる，ゲルマン人部族の総称で

Hosei University Repository

はなく，後述するように，ある特定の部族がスエービーを代表して，その名称を自らの部族名としていたと考えられる。

『ガリア戦記』には，スエービー以外のゲルマン人諸部族についての記述も見出される。その中でしばしば言及されているのが，キンブリーとテウトニーである[11]。キンブリーとテウトニーは，ユトランド半島に居住し，紀元前100年頃に，イタリア半島をめざして移動を始め，イタリア半島に入る直前でローマ軍に撃退された伝説的なゲルマン人諸部族である[12]。その二つのゲルマン人部族は，ほぼ時を同じくしてユトランド半島を離れ，ヨーロッパの中央部を南下し，『ガリア戦記』にも登場するケルト系のボイイーの地域に移動する。その間の行程は，伝えられている記述も限定され，不明な部分も多いが，いずれにせよローマ軍は，イタリア半島侵入をめざすキンブリーとテウトニーを，イタリア半島の北辺で撃退した[13]。その結果キンブリーとテウトニーは，もとの定住地域であるユトランド半島に戻る一方，その一部は南ドイツのライン川沿岸に定住する。

カエサルの時代には，キンブリーとテウトニーのイタリア半島への南下，そしてローマ軍との戦闘を直接体験していた同時代人のローマ人もいたのであり，伝説的であったとは言え，その二つのゲルマン人部族が，極めて現実的な存在としてとらえられていたであろうことは想像に難くない。しかしながら，カエサルの時代のキンブリーとテウトニーは，50年ほど前の両部族の南下の時とは異なり，ローマにとって脅威となる存在ではなかった。カエサルは，ライン川左岸におけるキンブリーとテウトニーの後裔を，アトゥアートゥキーとして言及しているが[14]，『ガリア戦記』に何度か登場するアトゥアートゥキーも，ローマ軍にとって，決して脅威を与えるゲルマン人部族ではなかった。カエサルの『ガリア戦記』におけるキンブリーとテウトニーは，あくまで歴史的な存在であり，過去においてローマに脅威を与えた，象徴的ゲルマン人諸部族として登場しているのである。

『ガリア戦記』には，上で触れたゲルマン人部族の他にも，別のゲルマン人諸部族が，数多く登場している。前述のスエービー，さらにキンブリー，テウトニー，そしてその二つの部族のライン川地域における後裔であるところのアトゥアートゥキーを含む，『ガリア戦記』で言及されているゲルマン人諸部族

Hosei University Repository

の名前を，その登場順に具体的に記せば，次のようになる。

キンブリー，テウトニー（Ⅰ-33）；スエービー（Ⅰ-37）；ハルーデース，マルコマンニー，トゥリボキー，ウァンギオネース，ネメーテース，エウドゥスィー（Ⅰ-51）；ウビー（Ⅰ-54）；ネルウィー（？），アトゥアートゥキー，コンドルースィー，エブロネース，カエロシー，パエマニー（Ⅱ-4），ウスィペテース，テンクテーリー（Ⅳ-4），スガンブリー（Ⅳ-16），ケルスキー（Ⅵ-10）（なおNerviiネルウィーはケルト人かゲルマン人か，記述の上からは不明である）。

これまで『ガリア戦記』の中の，主にゲルマン人についての記述を見てきたのであったが，もともと『ガリア戦記』は，ケルト人についての記録であり，ゲルマン人について主に記された記録ではないのは勿論のことである。その構成からすれば，『ガリア戦記』は，大体三つの部分に分かれている。最初の三分の一は，ガリアのケルト人についての全般的な説明で始まるが，その大部分が，カエサルの軍隊とゲルマン人部族を率いるスエービーのアリオウィストスの軍隊との戦いについての記述である。中間の三分の一は，アリオウィストスとの戦闘の勝利の後，ローマ軍に対抗したゲルマン人部族エブロネースのアンビオリクスとの戦い，そしてブリタンニアにおけるケルト人との戦いであり，最後の三分の一は，最終段階でガリアの全ケルト人を統括しローマ軍と対峙したケルト人部族アルウェルニーの代表ウェルキンゲトリクスとの戦い，である。その間にさまざまなケルト人部族との戦い，そして時にはゲルマン人部族との戦いが見出される。結局のところ，重点が置かれているのは，前半の，ゲルマン人部族スエービーのアリオウィストスとの戦いと，後半の，ケルト人部族アルウェルニーのウェルキンゲトリクスとの戦いである。カエサルは，アリオウィストスを敗北させ，ゲルマン人の大部分をライン川の右岸に押し戻し，ウェルキンゲトリクスに勝利して，ケルト人の地ガリアを属州として確定し，その二つの事実を『ガリア戦記』の中で強調的に表現したかったのであろう。

Hosei University Repository

(三)

タキトゥスの『ゲルマーニア』は，西暦100年頃のゲルマン民族の様々な部族について記された大変詳しい記録である。ゲルマン民族の諸部族については，タキトゥス以前にも，さまざまな歴史家による言及があり，またタキトゥスとほぼ同時代の著作には，プトレマイオスの『地理誌』[15]，そしてプリニウスの『博物史』[16]がある。その二人の著作は，いずれも比類のない重要性を持っているが，ゲルマン民族の諸部族に関する限り，タキトゥスの『ゲルマーニア』ほど，体系的に，総合的に記述された記録はない。そこには，時折苛烈で主観性に満ちた記述が見出されるにせよ，今日のドイツの中部から北部，つまりライン川の東および北の地域，さらには，ユトランド半島からスカンジナヴィア半島に至るまでの広大な地域における，ゲルマン人の諸部族の社会生活の様式，そしてゲルマン人の個々の部族についての極めて詳細な記述が見出される。その中には，例えば，後にブリテン島に移住して英国を創ることになった部族の一つであるアングルが，Angliiとして言及されている[17]。紀元100年頃のゲルマン人は，タキトゥスによれば，大きく三つの種族に分かれていた。即ち，インガエウォネースIngaevones，イスタエウォネース Istaevones，ヘルミノーネースHerminonesであり[18]，それぞれ，北海沿岸およびその周辺地域に居住するゲルマン人部族、エルベ川流域に居住するゲルマン人部族，その他の地域に居住するゲルマン人部族であったと推測されている。アングルの属していたのはインガエウォネースであり，その中には，同じ北海沿岸に居住していたフリージアンFrisiiも含まれている[19]。そのように，『ゲルマーニア』には，アングル，フリージアンといった，後のゲルマン民族大移動の時期にも登場することになる有力な部族が，見出される一方で，ゲルマン民族の移動期および後のゲルマン諸国家の割拠の時代に，極めて重要な役割を果たすフランクや，その一部がアングルとともにブリテン島に渡って英国を創ったサクソンの名は，見出されない。タキトゥスの『ゲルマーニア』の中のゲルマン人諸部族の名称を登場順に列挙すれば，次のようになるであろう。

Marsiマルスィー，Gambriviiガンブリウィイー，Vandilii ワンディリイー，

Hosei University Repository

Tungriトゥングリー，Vangionesヴァンギオネース，Tribociトゥリボキー，Nemetesネメテース，Ubiiウビイー，Bataviバターウィー，Chattiカッティー，Mattiaciマッティアキー，Usipiウースィピー，Tencteriテンクテリー，Bructeriブルクテリー，Chamaviカマーウィー，Angrivariiアングリワリイー，Dulgubniiドゥルグブニー，Chasuariiカスアーリイー，Frisiiフリースィイー，Chauciカウキー，Cheruscciケルスキー，Fosiフォスィー，Cimbriキンブリー，Suebiスエービー，Semnonesセムノーネース，Langobardiランゴバルディー，Reudigniレウディーグニー，Avionesアウィオーネース，Angliiアングリイー，Variniワリーニー，Eudosesエウドセース，Suarinesスアリーネース，Nuitonesヌイトーネース，Hermunduriヘルムンドゥーリー，Naristiナリスティー，Marcomanniマルコマンニー，Quadiクァディー，Marsigniマルスィグニー，Buriブーリー，Lygiiリュギイー，Hariiハリイー，Helveconesヘルウェコネース，Manimiマニミー，Helisiiヘリスィイー，Nahanarvaliナハナルワーリー，Gotonesゴトーネース，Rugiiルギイー，Lemoviiレモウィイー，Suionesスイーオネース。

タキトゥスの時代からゲルマン民族大移動期まで，およそ二，三百年が経過している。その間，タキトゥスの時代に四十以上もあった上の部族のうち，大移動期にも依然として部族名の連続性を保っていたのは，次の部族である。

ワンディリイー（ヴァンダル），フリースィイー（フリージア），スエービー，ランゴバルディー（ランゴバルト），アングリイー（アングル），エウドセース（ジュート），マルコマンニー（マルコマンネン），クァディー，ゴトーネース（ゴート），ルギイー，スイーオネース（スウェーデン）。

四十もの部族の数が，大移動期に上の部族を含めて十余りに減少したのは，その間さまざまな部族の離合集散があったからであるが，その離合集散の過程を経た後の有力な部族の中には，タキトゥスの「ゲルマーニア」に言及されて，さらに部族として拡大されたアングル，ジュート，「ゲルマーニア」で有力部族として言及されていて，そのままその勢力を維持し続けていたゴート，ヴァ

Hosei University Repository

ンダル，ランゴバルト，フリージアン，その核となる部族が，もともと別の有力部族としてタキトゥスの『ゲルマーニア』に記載されていたと思われるサクソン[20]，『ゲルマーニア』で記載されている多くの少数部族が連合したと思われるフランク，『ゲルマーニア』で記載されている有力ないくつかの部族が連合して形成されたと思われるアレマンネン，テューリンゲン，バイエルンがいる。また，『ゲルマーニア』ではいくつかの部族の連合体の名称であったが，後には個別部族の名称となっているスエービーのような部族がいる。もっとも，ブルグンドのように，ゴートやヴァンダル，ランゴバルトと同じ時期から，既に有力な部族として知られていたにもかかわらず，カエサル，タキトゥスに言及されていない部族もあるけれども。いずれにせよその離合集散の結果として残った十余りの部族は，その一つ一つが，タキトゥスの時代の部族と比すれば大変大きな部族になっていた[21]。なお，前述の『ガリア戦記』に現われるゲルマン人の中で，エウドゥスィーは[22]，タキトゥスの『ゲルマーニア』のエウドセース[23]と同じ部族と思われ，後のジュートと考えられる[24]。

(四)

ところで古期英語の文献に，*Widsith*『ウィードスィース』というおよそ140行からなる詩が存在する[25]。『ウィードスィース』は，詩人が，時代を超えて，ゲルマン人諸国家を中心に，様々な国家を訪問し，国王に会うという構成の詩であり，その中に登場する主なゲルマン人国家は次のようなものである。

アングル，サクソン，ジュート，フリージア，フランク，ヘトワレ（カスアーリイー），ブルグンド，テューリンゲン，ワリーニー，スエービー，ルギイー，ヴァンダル，ランゴバルト，ゴート（東ゴート），イフサス（ゲピート），デネ（デーン），スウェーオン（スウェーデン），イェーアタス，等。

上のゲルマン人は，『ウィードスィース』に見出されるすべてのゲルマン人ではないが，その中に，ゲルマン民族の大移動の時代に登場するほとんどすべてのゲルマン人部族国家が含まれていることに驚かされざるを得ない。その

Hosei University Repository

『ウィードスィース』の記述は，ゲルマン民族大移動以前の，まだユトランド半島にいた時代の，アングルについて触れられているという点においても，大変重要である。なぜなら，ゲルマン民族大移動以前の，ユトランド半島をめぐる状況，とりわけアングル，ジュートと，デーンとの関係については，伝えられている記述が少なく，不確かな部分が多いからである。さらに，その『ウィードスィース』の記述には，第一次ゲルマン民族大移動のゲルマン人諸部族と，後の第二次ゲルマン民族大移動の主人公とも言うべき，スカンジナヴィアのヴァイキング人の一部（デーン，スウェーオン，そしてイェーアタス）が，並列的に述べられている点でも，大変重要である。おそらく『ウィードスィース』の創られたのは，第一次ゲルマン民族の大移動後で，かつ，第二次ゲルマン民族の大移動以前であると思われる[26]。たとえ必ずしも時代が全く重なるわけではなく，それぞれのゲルマン人の主な活動の時期に，二，三百年の時間的相違があるとしても，ユトランド半島にいた時のアングルが，デーン，そしてイェータスと，同じゲルマン人国家の世界像の枠組の中で，相互に共存する国家として登場しているという状況は，古期英語で書かれた最古の叙事詩*Beowulf*『ベーオウルフ』の世界像と共通のものである。いずれにせよ，『ウィードスィース』には，スエービーが，アングル，サクソン，ジュート，フリージアン，サクソン，ブルグンド，ヴァンダル，ゴート，ランゴバルト，テューリンゲン，等と並列的に，個別的な部族として言及されており，タキトゥスの『ゲルマーニア』の時代と，スエービーの内実が変化していることが窺われ得る[27]。一方，アレマンネンについての言及は見出されない。次に『ウィードスィース』よりも後代に成立したとされているが，やはり中世初期ゲルマン人社会が描かれた叙事詩『ベーオウルフ』に現われるゲルマン人を見ることにしたい。

『ベーオウルフ』は，アングル人の詩人によって書かれたとされる古期英語の最古の叙事詩である[28]。その成立時期については諸説があるが，その中に，デネ，そしてイェーアタスというゲルマン人国家，そしてその二つの国家との関連で，他のゲルマン人諸国家が言及されていて，興味深い。『ベーオウルフ』に言及されているゲルマン人国家もしくは部族は，次のようである[29]。

デネ，イェーアタス（ゲーアタス），スウェーオン（スウェーデン），フラン

Hosei University Repository

カン（フランク），フーガス（フランク），ヘトワレ（カスアーリイー，ハットゥアリイ），フレーザン（フリージアン），エーオタン（ジュート），イフサス（ゲピート），ウュルヴィンガス，ヘアゾベルダン，等。

イェーアタスという国家は，上で引用した『ウィードスィース』以外には，他のヨーロッパの歴史的文献には，その名がほとんど見出されないが[30]，それは，スカンジナヴィア半島南西部に歴史的に実際に存在したと推測され得るゲルマン人国家である。そのイェーアタスは，主人公ベーオウルフの故国であり，そしてゴートと深い関係があったと推定される国家である。『ベーオウルフ』には，アングルに関しては，わずかではあるがオッファ王の挿話の中で触れられていて[31]，またジュートについてはエーオタンとして言及されているが[32]，サクソンに関しては全く言及がない。『ウィードスィース』に比して，ゲルマン人諸部族が，網羅的に記述されているわけではなく，本稿の主題であるところのスエービーも直接的には触れられていず，またアレマンネンも言及されていない。

（五）

これまで，カエサルの『ガリア戦記』，タキトゥスの『ゲルマーニア』，そして古期英語の『ウィードスィース』，『ベーオウルフ』に現われるゲルマン人諸部族，とりわけその中のスエービーを見てきたのであったが，ここで，スエービーという部族の持つ，その構造の二重性，そしてそのアレマンネンとの関係について考えてみたい。

スエービーは，繰り返せば，カエサルの『ガリア戦記』にも，またタキトゥスの『ゲルマーニア』にも登場し，タキトゥスの時代には，北海沿岸からバルト海にかけての北ドイツ一帯に居住していた古くからの有力部族である。ゲルマン民族の大移動の時期には，一部がイベリア半島北部に移住し，一部が今日のドイツ南西部，即ち，シュヴァーベン地方，そしてスイスへ移住した。スペインへ移住したスエービーによって造られたスエービー王国は，やがて滅亡するが，ドイツ西南部やスイスに移住したスエービーは，その後，北部スエービ

Hosei University Repository

ーを中心に形成されたアレマンネン王国に参加する。そのスエービーは，今日のドイツ・バーデンヴュルテンベルク州のシュヴァーベン地方の人々と，そしてチューリッヒを中心とする，スイスのドイツ語圏の地域の人々の祖先である。

ところで，タキトゥスの『ゲルマーニア』に登場するスエービーは，その中に多くのゲルマン人部族を含む大部族の名称である[33]。スエービーは，今日の北ドイツ，中部ドイツ地域の多くのゲルマン人部族を含んでいたので，今日バルト海と呼ばれている海は，スエービー海と呼ばれていたほどであった[34]。しかしながら，その後のスエービーは，『ゲルマーニア』におけるスエービーのような包括的な部族ではなく，個別的な部族となっている。一方『ガリア戦記』に現われるスエービーは，ゲルマン人部族の代表であり，『ゲルマーニア』のスエービーの存在を連想させる。カエサルの時代も，個別的なスエービーは存在していなかったと思われるが，しかしながら『ガリア戦記』には，実際に個別的なスエービーが登場している。つまり『ガリア戦記』では，スエービーは，ゲルマン人諸部族の代表として記述されているが，一方で『ゲルマーニア』でスエービーに属しているとされるマルコマンネン等とともに，個別のゲルマン人部族として，並列的に列挙されているのである[35]。その場合，考えられるのは，『ガリア戦記』に現われるスエービーが，ある特定のゲルマン人部族で，その部族が自らをスエービーと称している，ということである。それでは自らがスエービーの代表として行動していた，そのゲルマン人部族とは，具体的にどの部族だったのであろうか。

『ゲルマーニア』によれば，スエービーの中核部族はセムノーネースであった[36]。しかし，『ガリア戦記』におけるアリオウィストスが，セムノーネースであったという記録は伝えられていない。シュヴァルツは，『ガリア戦記』のアリオウィストスに率いられていたスエービーは，クァディーであったとしている[37]。クァディーは確かにカエサルの遠征当時，マルコマンネンとともに，ライン川沿岸地域，とりわけその上流をその支配領域としていた有力なゲルマン人部族であった。カエサルが，ローマ軍の総指揮官としてガリアに遠征し，スエービーの代表アリオウィストスに対して送った手紙に対するアリオウィストスの返答の内容は，一ゲルマン人部族の意思を表わしたものとは思えない。その当時のゲルマン人諸部族全体の代表としての認識が，そこに見出され，ア

Hosei University Repository

リオウィストスは，スエービーを主体としたゲルマン人諸部族の連合体を，ローマと対等あるいはそれ以上の存在と考え，またカエサルもアリオウィストスをゲルマン人の王としているのである[38]。シュヴァルツの言うように，クァディーが，そのスエービーの内実であるとすれば，そのクァディーとは，どのような部族なのであろうか。

クァディーは，「ゲルマーニア」にも言及されているが[39]，タキトゥスの時代には，マルコマンネンの東にいた。「ガリア戦記」にスエービーとして登場するゲルマン人部族が，クァディーであるのであれば，カエサルのローマ軍に撃退された後，クァディーが，その部族の中核を東へ移動させていったということは，大いにあり得ることであろう。そして，タキトゥスの時代に，クァディーがマルコマンネンの東にいたということは，バイエルンの登場との関連からも，重要な事実である。

時代の変遷とともに，タキトゥスの時代の総称としてのスエービーは，その内実が変化している。即ち，スエービーは，セムノーネースを中心とした北方の諸部族の大連合体の総称から，より少数の部族から構成される具体的な部族の名称になっている。例えばタキトゥスの時代には，アングルとセムノーネースは，いずれも同じスエービーに属していた。しかしその後アングルが民族大移動の時期において有力な部族として登場する時に，スエービーも同じ様な個別的な一ゲルマン人部族として登場する[40]。カエサルの時代のアリオウィストスに率いられたスエービーが，シュヴァルツの言うように，その内実がクァディーであるのであれば，タキトゥスの時代以後，スエービーとして登場する部族も，実はある一つの，あるいは複数の具体的なゲルマン人部族であるということになるであろう。その時に，スエービーの中核となっていたのは，どのような部族だったのであろうか。スエービーはその後，一部は南西ドイツに移住し，また別の一部はイベリア半島に移住する。また，ヨーロッパ中部のマルコマンネンの近くにも移住している。例えば，6世紀前半，エルベ川中流地域に，スエービーと称して居住していたセムノーネースの例も伝えられている[41]。つまり，アングルその他がスエービーの枠の中に留まらず，より大きな部族として発展していった時に，もともとスエービーに属していた別々の部族が，それぞれ移動していった地域で，自らの部族名ではなく，スエービーの名前を用い

Hosei University Repository

るようになったのであろう。例えば，スペインへ移住したスエービーについても，その部族名について諸説がある[42]。そしてそれぞれの地域のスエービーの成立の時に，諸部族のさまざまな再編があったものと想像されるが，しかしながら，その再編の過程は知ることはできない。

(六)

一方，アレマンネン（アラマンネン）は，カエサルにも，またタキトゥスにも見出されない部族名であるが，ゲルマン民族の大移動の時期までには，極めて有力な部族となっていた。5世紀の後半には，アレマンネン王国は，北はヴュルツブルクから，フランクフルト近郊のアシャッフェンブルク，さらには，中期高地ドイツ語で書かれた叙事詩「ニーベルンゲンの歌」にも描かれた，ブルグンド（第一次ブルグンド王国）の首都であったヴォルムスまで広がり，西は第二次ブルグンド王国の領域のブザンソン，そしてラングル，トロワ近くまで，東はアウクスブルクからパッサウまでを占めていた[43]。そして6世紀の前半に，メロヴィング王朝の国王クロートヴィッヒのもとでのフランク王国との戦いに敗れ，フランク王国に併合されることになる[44]。

アレマンネンについての，歴史書における初出は，213年における，ローマ皇帝カラカラによる，アレマンネンとの戦闘についての記述である[45]。つまりそれ以前のアレマンネンについての言及は存在せず，従ってアレマンネンは，サクソンやフランクのように，ある時点で，タキトゥスの『ゲルマーニア』に登場しているいくつかのゲルマン人が再編されて，形成された部族であると想像され得る。それでは，どのような部族がそのアレマンネン部族の形成に参画したのであろうか。

アレマンネンは，さまざまな研究者により，いくつかのスエービー系の部族が連合して形成した部族であるとされている。例えば，B.シュミットは，アレマンネンの主な構成部族が，スエービー系のセムノーネースとヘルムンドゥーリーであったとし，時によっては，アレマンネンの代わりにスエービーという名称が用いられる場合があったと述べている[46]。長友氏は，ヒエロニムス，そして特にアンミアヌスの記述をもとに，4世紀におけるアレマンネンについ

Hosei University Repository

て詳述しているが[47]，その中で，アレマンネンが，七人の首長によって統治されていたという事実に触れている。その事実は，アレマンネンの構成について示唆的であると言えるであろう。つまり，ヒエロニムスにより，ローマ皇帝ユリアヌスが，西暦356年に，アレマンネンの軍隊を壊滅させたと伝えられている，ストラスブルクにおける戦いについて，アンミアヌスは，具体的に，アレマンネンには七人の首長がいて，七つの地域を支配していたというのである。つまりそれは，アレマンネンが七つのゲルマン人部族から構成されているということを示すものとも考えられるのである。B.シュミットの言うように，アレマンネンが，主にセムノーネースとヘルムンドゥーリーによって構成されていたにせよ，その他にいくつかのゲルマン人部族が，アレマンネンの部族の形成に参画していたことの，それは一つの傍証となるものではないであろうか。

一方シュヴァルツは，アレマンネンの成立については，次のように述べている[48]。アリオウィストスのスエービー，即ちクァディーは，カエサルとの戦いで敗北し，マルコマンネンと共に東へ移動する。その結果，南ドイツ，マイン川流域の空白地域に，新たなゲルマン人部族集団の結成の余地が生まれる。そしてそこに，タキトゥスの頃から，スエービーの中核部族とされていたセムノーネースが関与する。セムノーネースを中心に，クァディー，——彼等は東へ移住した後，2世紀後半の，ドナウ川流域におけるマルコマンネン戦争に参加し，ローマに撃退され，南ドイツへ戻ろうとしていたのであるが——，そのクァディーが参画し，またハルーデースもそこに加わったのである。ちなみにハルーデースは，カエサルの『ガリア戦記』に登場するゲルマン人部族であり，スエービー（クァディー）やマルコマンネンと共にカエサルと戦い，敗北したが，クァディーやマルコマンネンのように東へ移住はせずに，南ドイツにとどまっていたのである。

また植村氏は，L.シュミットに基づき，アレマンネンが，スエービーの中核部族であるセムノーネースを中心に，テンクテリー，ウシピテース，ワンギオネース，そしてトゥーバンテース等の参加により成立したと述べている[49]。ドプシュは，3世紀以降のアレマンネンのローマ帝国領内への定住生活の状況について，極めて詳細な，そして適切な記述を表わしているが[50]，アレマンネンの起源について言及せず，また関心を示していない。それはアレマンネンだ

Hosei University Repository

けでなく，ゲルマン人諸部族全般についても同じであるけれども。

諸研究家の中で共通しているのは，アレマンネンの成立に，スエービーの中核部族のセムノーネースが中心的な役割を演じたということである。総称としてのスエービーが個別的なスエービーとなり，またドイツにおいて個別的なスエービーの役割がアレマンネンにとってかわられるという，ゲルマン人諸部族の再編成の後に，スエービーの中核的な部族であったセムノーネースが，何の戦闘の報告が伝えられることもなく，北ドイツの一つの平均的な部族となっているという状況が，逆に，セムノーネースの中核部分が，諸部族の再編において果した重要な役割を，明示しているとも言えるであろう。

(七)

ところで，アレマンネン（アラマンネン）という言葉は，西欧のいくつかの言語に見出され，重要な意味を持っている。例えば，口語ラテン語である俗ラテン語から分かれたフランス語，スペイン語では，「ドイツ」，「ドイツ（人）の」，「ドイツ語」を意味する言葉は，それぞれ，Allemagne，allemain(e)，allemain（仏語），Alemania，aleman(a)，aleman（西語）であり[51]，アレマンネンが，ゲルマン民族の代表のように捉えられている。それは，カエサルの『ガリア戦記』の中で，スエービーをゲルマン人の代表であったとしているのと同じ様な捉え方のように見える。一方，同じロマンス語に属し，フランス語やスペイン語と同じように俗ラテン語から分かれたイタリア語では，「ドイツ」，「ドイツ（人）の」を表わす言葉は，それぞれ Germania（イタリア語によるドイツの正式な国名はRepubblica Federale Tedesca であるが），germanicoであり，フランス語やスペイン語の場合とは異なる。一方イタリア語にも，アレマンネンと関連のあるalemannoという言葉がある。それは，名詞としては，ゲルマン人部族としてのアレマンネンを意味し，現在の高地ドイツ語の一つであるアレマンネン方言の意味も持っている他，詩的な表現として「ドイツ人」を意味している。また，形容詞としては，「アレマンネン人の」，「高地ドイツ語のアレマンネン方言の」，という意味の他に，やはり，詩的な表現として，「ドイツの」という意味を持っている。フランス語，スペイン語の用法と，イ

Hosei University Repository

タリア語の用法の間に差異が生じている理由の一つは，既に古典期の文語ラテン語では，北方の異民族を表わす名称として，タキトゥスの時代からのGermaniaという言葉が一般化していたので，口語ラテン語からロマンス諸語への分化の時代にも，ラテン語の直系のイタロ－ロマンス語では，文語ラテン語で用いられていたGermaniaという言葉が，ドイツを表わす名称として，そのまま受け継がれていたからであろうと思われる。しかしその一方で，前述のように，イタリア語の中にも，明らかにアレマンネンと関係を持つalemannoという言葉があり，詩的な表現として「ドイツ人，ドイツの」という意味を持っている。それには次のような歴史的背景があるものと考えられる。

フランク王国によってゲルマン諸部族が統一され，各部族が，もともとの部族名を保持する領邦国家になった時に，アレマンネンの国家は，アラマンニアという領邦国家の地域名として残されていた。例えば，西暦6～7世紀のフランク王国メロヴィング王朝のもとでは，旧アレマンネン王国の領邦国家としての名称は，Alamannien（Alamannia）であり，8世紀のシャルルマーニュの時代には，ゲルマン人の部族国家でフランク王国に併合された地域は，それぞれBurgundia（旧ブルグンド王国），Thuringia（旧テューリンゲン王国），Alamannia（旧アレマンネン王国），Baioaria（旧バイエルン王国），Saxonia（旧ザクセン国），等となっていた[52]。その後，フランク王国が三つに分割され，そして西フランク王国がフランク王国からフランス王国へ，東フランク王国が神聖ローマ帝国へとなっていくが，やがてアレマンネンという言葉は，東の神聖ローマ帝国の別称となるのである[53]。

それではなぜアレマンネンという言葉が，フランス語やスペイン語で，神聖ローマ帝国の別称として，即ち，ドイツ，ドイツ語，ドイツ人という意味の言葉として用いられるようになったのであろうか。アレマンネンという言葉は，もともとゲルマン語起源の言葉であり，ラテン語起源の言葉ではない。アレマンネンは，前述のように，スエービー系のセムノーネースを中心とする，いくつかのゲルマン人部族の連合体と推測され，その部族の連合再編の時，all manという強調的な表現を用いたのであった[54]。従ってそれは，ゲルマン人の有力な部族名という意味がこめられていたとしても，後のドイツという国家を意味していたのではなかった。神聖ローマ帝国に，いくつかの旧ゲルマン人部

Hosei University Repository

族国家名が領邦国家として存続していた中で，どのような経緯で，アレマンネンという言葉に，ドイツという意味が付与されたのであろうか。

フランク王国が三分割され，西のネウストリアが西フランク王国，さらにはフランスとなり，東のアウストラシアが東フランク王国，さらには神聖ローマ帝国となった時，既に西の国家はフランクの部族名を国家名にしていて，また東の正式国家名は神聖ローマ帝国となっているので，東の国家にフランクという国家名を名づけることはできない。そこで，神聖ローマ帝国の統治者は，東のゲルマン人領邦国家の名称の中で，最も総称的なゲルマン人部族の名称を，神聖ローマ帝国の別称として選んだのではないかと思われる[55]。そしてその名称が用いられることになったのは，10世紀初頭から13世紀半ばまで続いたシュヴァーベン公国の成立と関連を持っている[56]。つまりアレマンネン王国がフランク王国に併合され，フランク王国内のアラマンニアという領邦国家になった後，そのアラマンニアという領邦国家名が，10世紀初めにシュヴァーベンという名称の公国に代わってゆく過程で，神聖ローマ帝国領内における旧名としてのアレマンネンが消失し，その結果，神聖ローマ帝国の別称のアレマンネンが，別称として存在し得ることになったのである。

神聖ローマ帝国の別称としてのアレマンネンは，西側のフランク王国の国民，とりわけもともとのガリアのケルト人にとっても，自然な名称として受け入れられたものと思われる。西側，即ちガリアの地域の人々にとっては，西ローマ帝国の末期に，そしてその崩壊後に，ガリアに侵入して来たゲルマン人のうち最有力のゲルマン人はフランクであり，また，最もガリアに近い場所に定住していたゲルマン人は，アレマンネンであった。ガリアを含む西欧の大部分がフランク王国によって統一された時も，西側ネウストリアに居住する圧倒的多数のガロ・ロマンス人にとって，東側アウストラシアのゲルマン人は，北部がフランクであり，南部がアレマンネンであった。その西側ネウストリアがフランクという国名になった時，東側がアレマンネンになるのであれば，その名称は自然に受け入れられたことであろう。そこで西側の言語，即ちガロ－ロマンス語から発達したフランス語においては，「ドイツ」を表わす語が，Allemagne そして「ドイツ人，ドイツの，ドイツ語」を表わす語が，allemainになったのである[57]。フランス，即ちケルト系のゴール人の住む西側の地域にとっては，

Hosei University Repository

東側のゲルマン人国家は，決して「神聖ローマ帝国」ではなかった。あくまでそれは「ゲルマン人の国家」あるいは「チュートン人の国家」即ち「ドイツ」であった。それ故，ドイツをあらわす，もう一つの国名であるところのアレマンネンという名称が，西側のフランク王国，そしてその後のフランスにおいて，隣国の呼称として用いられるようになったのは自然であったであろう。

一方イタリアにとっては，東フランク王国が神聖ローマ帝国になった時，その名称と，もう一つの名称であるアレマンネンを，ドイツの国名として受け入れた点では，フランスやスペインと同じであった。しかしながらイタリアの場合には，タキトゥスの時代から用いられてきたゲルマーニアという言葉があった。そこで，神聖ローマ帝国の名称が実質を伴わなくなった時点で，フランス語やスペイン語では，雅語としてのアレマンネンを一般的な国名のドイツの意味で用いるようになったのに対して，イタリア語では，古くからのゲルマーニアを一般的な国名でドイツの意味で用い，一方アレマンネンに関する表現は，雅語として存続させたのであろう。またイタリア半島は，ゲルマン民族の大移動期には，東西ゴートによる侵入を，その後にはランゴバルトの侵入を蒙ったが，ローマ人にとっては，ゴートやランゴバルトは，あくまでゲルマン人の一部であり，ゲルマン人の代表でも，ドイツ人全体でもなかった。それ故イタリア人は，ゴートやランゴバルト以外のゲルマン人の部族の名称，例えばアレマンネンの名称も，同じ様に，ドイツ全体の名称にすることはなかったのである。

ところで，不思議なことであるが，そのアレマンネンという言葉は，ドイツ語の地名としては残っていない。ゲルマン人の部族の名前は，通常，ある一定の期間以上の定住があった地域には，その痕跡として，その部族に関する地名が残されている場合が多い。とりわけ，ゲルマン人部族国家が，たとえフランク王国に併合されたとしても，その領邦国家として存続している場合は，その領邦国家名が地名として存続している場合がほとんどである。ゲルマン人の部族名がドイツおよびドイツ以外の地名および国名として存続している場合は，次のようなものがある。例えば，アングルは，英国のイングランドとドイツのシュレースヴィッヒ近郊のアンゲルンおよびその南方のエンギリンに，サクソンは，ドイツのニーダーザクセン州や旧東ドイツの二つのザクセン州その他に，ジュートは，デンマークのユトランド半島に，フリージアンは，ドイツとオラ

Hosei University Repository

ンダのフリージアに，ゴートは，スウェーデンのゴットランド島に，ブルグンドは，デンマークのボルンホルム島とフランスのブルゴーニュに，ランゴバルトは，北イタリアのロンバルディアに，テューリンゲンは，ドイツのテューリンゲン州に，そしてスエービーは，ドイツのシュヴァーベンに，それぞれ部族名が伝えられている[58]。またフランクの場合は，ドイツのフランケン地方（都市名ではフランクフルト他）と，さらにはフランスという国名に，その部族名が残っている。しかしアレマンネンの場合は，その部族名は，フランス語やスペイン語に，もともとの部族名の意味とは別に，ドイツという国名として用いられている他は，ドイツの地域の名前ではなく，ドイツ語のアレマンネン方言という，ドイツ語の一方言としての，言語上の分類の場合にしか用いられていない[59]。つまり前述のように，アレマンネンが，ドイツ語圏で地名化する場合には，シュヴァーベンとなっているのである[60]。

いずれにせよ，セムノーネースを中核に，他のいくつかのスエービー系のゲルマン人部族が統合されたのがアレマンネンであれば，スエービーとアレマンネンは，全く同一の存在ではないとしても，系統的には，同じスエービー，ドイツ語ではシュヴァーベンと言えるであろう。つまり，同じゲルマン人部族が，外から（ガリア人から）見ればゲルマン人の部族連合のアレマンネンであり，内から（ゲルマン人の諸部族から）見れば，その構成部族の中核がスエービーである以上，シュヴァーベンだったのである。ちなみに『フランク史』を著わしたトゥールのグレゴリウスは，スエービーとアレマンネンを，全く同じ部族として記述している[61]。

［注］

（以下の注の引用文献の中で，Herrmann, J.(hrsg.), *Die Germanen*, Band I, 5 durchgesehene Auflage, 1988.；Band II, 2 durchgesehene Auflage, Akademie-Verlag, Berlin, 1986. は,それぞれ，*Die Germanen*, Band I および *Die Germanen*, Band II と省略する）

(1) Beda, *Venerabilis Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum. Venerable Baedae Opera Historica*, ed. Plummer, C., 2 vols., Oxford, 1896. *Baedae Historia Ecclesiastica Gentis Anglorum*, ed. and trans. J. E.

Hosei University Repository

King, *Loeb Classical Library*, 2 vols., London and Cambridge, Massachusetts, 1930. O. E. translation : *The Old English Version of Bede's Ecclesiastical History of the English People*, ed. Thomas Miller, *EETS*, nos. 95-96, 110-11, 2 vols., London, 1890-98. 邦訳：長友栄三郎訳,『イギリス教会史』, 創文社, 1971年, 36-39頁。Cf. Collingwood, R. G. and Myres, J. N. L., *Roman Britain and English Settlements*, Second edition, Oxford University Press, 1937, pp.336-337.

(2) Campbell, A., *An Old English Grammar*, Oxford University Press, 1959, p.3. Campbellは, 6世紀のプロコピウスの,「ブリテン島には, アングル, フリージアン, ブリトンがいた。」(Bell. Goth. iv. 19) という記述に触れ, フリージアンのブリテン島への移住の事実とその言語に言及している。プロコピウスの言うブリトンとは, ブリテン島の先住者のケルト人であるが, その他のブリテン島に居住する人々として, アングルとフリージアンのみの名が挙げられているのは, プロコピウスが取得していた情報量の限界を示す一方で, ブリテン島に渡った人々の中に, フリージアンがいたということを, 明示しているものと考えられる。東ローマのプロコピウスの文献は, Procopius, *De bello Vandalico, De Bello Gothico*, etc., ed. and trans. H. B. Dewing, *Loeb.*, 7 vols., London and New York, 1914-40 ; *De bello Gothico*, in *Procopii Caesariensis opera omnia II*, ed. J. Haury, Leipzig, 1963. またDemandt, A., *Die Spätantike*, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, 1989, p.28および, Stenton, F. M., *Anglo-Saxon England*, 2 nd ed., Oxford University Press 1947, p.6, そしてCollingwood, R. G. and Myres, J. N. L., 前掲書341頁を参照。フリージアンのブリテン島への移住については, さらにGodfrey, J., *The Church in Anglo-Saxon England*, Cambridge University Press, 1962, p.60, そしてBaugh, A. C. & Cable, T., *A History of the English Language*, 3rd ed., Routledge & Kegan Paul plc., London, 1978, pp.47-48にも言及が見出される。もっとも, 例えばドプシュのようにフリージアンのブリテン島への移住について否定的な見解を持つ研究者もいる。Cf. Dopsch, A., *Wirtschaftliche und soziale Grundlagen der europäischen Kulturentwicklung, aus der Zeit von Caesar bis auf Karl den Grossen*, zweite, veränderte und erweiterte Auflage, Wien, 1923-24. 邦訳：アルフォンス・ドプシュ著, 野崎直治, 石川操, 中村宏訳,『ヨーロッパ文化発展の経済的社会的基礎—

Hosei University Repository

—カエサルからカール大帝にいたる時代の——」，創文社，1980年，305頁。

(3) Caesar (Gaius Iulius Caesar), *Commentarii de bello Gallico*, ed. G. Dorminger, 2. Auflage, München, 1966. 邦訳：カエサル著，近山金次訳，「ガリア戦記」，岩波書店，1942年。

(4) Tacitus (Publius Cornelius Tacitus), *Germania. Cornelii Taciti de origine et situ Germanorum*, ed. J. G. C. Anderson, Clarendon Press, Oxford, 1938. 邦訳：タキトゥス著，泉井久之助訳，（改訳）「ゲルマーニア」，岩波書店，1979年。

(5) 堀米庸三，「ヨーロッパ中世世界の構造」，岩波書店，1976年，153-154頁。

(6) カエサル，「ガリア戦記」，I-51，I-53，IV-1，他。

(7) タキトゥス，「ゲルマーニア」，2，38，39～45。

(8) Schwarz, E., *Germanische Stammeskunde*, Carl Winter · Universitätsverlag, Heidelberg, 1956, pp.156-157.

(9) ここではSchwarzをもとに，ある程度それを敷衍して述べたが，Schwarzの説明は歴史的な事実関係を捨象し，スエービーの部族としての行動の軌跡を示したものである。従って，二つの方向を示すスエービー人の移動には，それぞれの移動の歴史的契機があり，また時期も異なる。

(10) カエサル，「ガリア戦記」，I-31～54，II-1～35。

(11) 上掲書，I-33，I-40，II-29，VII-77，他。

(12) キンブリーとテウトニーは，まず紀元前2～1世紀のポセイドニオスPoseidonios (Posidonius) の*Historiai*「歴史」に言及されている。ポセイドニオスの著作は，そのほとんどが伝わっていないが，プルタルコスやマリウス，リウィウスによって，その内容を間接的に知ることができる。Cf. Seyer, R., *Die Germanen*, Band I, p. 41 ; Schwarz, E., *op. cit.*, p. 54, p.58.また，その二つの部族は紀元18年のストラボンの*Geographica*「地理誌」に見出される。Strabon, *Geographica*VII, 1, *Geography*, ed. and trans. Horace Leonard Jones, *Loeb.*, 8 vols., 1917-32. Cf. Seyer, R., *Die Germanen*, Band I., p.45.プルタルコスによれば，キンブリーとテウトニーの他に，もう一つのゲルマン人部族アンブローネンも共に行動したとされているが，アンブローネンはテウトニーの支族と考えられている。Schwarz, E., *op. cit.*, p.58, p.61. Cf. Seyer, H., *Die Germanen*, Band I, pp.201-202 ; Weber, V., *ibid.*, p.271.

Hosei University Repository

(13) *Die Germanen*, Band I, Abb. 51. Zuge der Kimbern, Teutonen und Ambronen zwischen 120 und 101 v. u. Z.

(14) カエサル，前掲書，II-29，他。

(15) Ptolemaius：Klaudios Ptolemaios, *Claudii Ptolemaei Geographia*, ed. Karl Müller and C. T. Fischer, 2 parts., Paris, 1883-1901. *Geographia*, ed. C. F. A. Nobbe, Leipzig, 1843/1845.

(16) Plinius (d. A.), *Historiae naturalis. Natural History*, ed., and trans. H. Rackham and W. H. S. Jones. *Loeb*. 10 vols., London and Cambridge, Mass., 1938-56.

(17) タキトゥス，「ゲルマーニア」，40。そこではアングルが，インガエウォネースの中で，固有の部族としての独自性を持っていたということは窺うことができるが，後のブリテン島への移住後，優れた文化を開花させたノーサンブリア王国の担い手としてのアングルは，見出すことはできない。ブリテン島移住の前にアングルの果たした重要な役割は，ヘルムンドゥーリー，ワリーニーと共にテューリンゲンの成立に参画したことであろう。Cf. Schmidt, B., *Die Germanen*, Band II, p. 337.

(18) タキトゥス，「ゲルマーニア」，2。その三つの種族についての言及はプリニウスにも見出される。Plinius (d. A.), *Historiae naturalis*, 4, 99. プリニウスは，インガエウォネースに属する部族としてキンブリー，テウトニー等を挙げている。Cf. Seyer, R., *op. cit.*, p.50；Schwarz, E., *op. cit.*, p.133.

(19) タキトゥス，「ゲルマーニア」，34。

(20) サクソンはカエサルにもタキトゥスにも言及が見出されない。サクソンについての言及の初出はプトレマイオスである。

Ptolemaius：Klaüdios Ptolemaios, 2, 11, 7. 31. プトレマイオスに続くサクソンについての文献上の言及は，西暦285年もしくは286年のエウトロピウスEutropiusのものである。Eutropius, *Breviarum ab urbe condita*, ed. H. Droysen, *Monumenta Germaniae Historica, Auctores Antiquissimi II*, 1878, 1-182. Cf. Krüger, B., *Die Germanen*, Band II, p.17；Leube, A., *ibid.*, p.444；Seyer, R., *Die Germanen*, Band I, p.52. サクソンにおける問題は，部族としてのサクソンの核となった部族についてであり，これまでに，タキトゥスに現われるカウキーとレウディーグニーの二つの部族の説がある。

Hosei University Repository

(21) 増田四郎,「ヨーロッパ社会の誕生」, 啓示社, 1947年, 82-90頁, および27頁。またドプシュ著, 野崎直治, 石川操, 中村宏訳, 前掲書, 第2巻, 第1章, 455-554頁を参照。

(22) カエサル,「ガリア戦記」, I-51。

(23) タキトゥス,「ゲルマーニア」, 40。

(24) Schwarzは, エウドセースについて,「ゲルマーニア」の記述の傍証として, プトレマイオスによる, ユトランド半島のハルーデンの東, キンブリーの北に居住するEudosesと思われるゲルマン人部族についての記述を挙げ, ジュートをエウドセースの後裔と見なし得ると述べている。さらに「ガリア戦記」のエウドゥスィーが,「ゲルマーニア」のエウドセースであるとする理由として,「ガリア戦記」の多くの写本のうち, Sedusiiとなっている部分は正しくはEudusiiであり, ローマの歴史家オロシウスが, カエサルに基づいて, 当該部族の名前をEduses, 他, と記述していることを挙げている。Cf. Schwarz, E., *op. cit.*, pp.115-116 ; Collingwood, R. G. and Myres, J. N. L., *op. cit.*, p.338.

(25) *Widsith*, lines 35-44. *Widsith*, ed. R., W. Chambers, Cambridge University Press, 1912 ; *Widsith*, ed. K. Malone, London, 1936 ; *Exter Book*, ed. Krapp and Dobbie, Columbia University Press, 1936.

(26) *Widsith*にはランゴバルト王国の国王アルボインの言及があるので (Alfwine, l. 70), *Widsith*の成立は, 西暦568年以降となるであろう。もっとも*Widsith*は, もともとの原詩に, 後になって様々な加筆がなされているので, その構成も均一ではない。Cf. *Exter Book*, ed. Krapp and Dobbie, Introduction, p. xlv., pp. xlⅢ-xliv.

(27) *Widsith*では, line 22と, line 61に, スエービー王国が, 言及されている (Swæfum, 与格複数形)。Line 61では, アングル王国と共に並列的に列挙されている。

(28) *Beowulf. Beowulf and the Fight at Finnsburg*, ed. Fr. Klaeber, 3rd ed., D. C. Heath and Company, Lexington, Massachusetts, 1950. ; *Beowulf and Judith*, ed. E. v. K. Dobbie, Columbia University Press, New York, 1953. 邦訳：厨川文夫訳,「ベーオウルフ」, 岩波書店, 1941年 (「厨川文夫著作集 (上)」, 金星堂, 1981年に再録されている) ; 忍足欽四郎訳,「ベーオウルフ」, 岩波書店, 1990年 ; 山口秀夫訳,「古英詩ベーオウルフ」, 泉屋書店, 1995年, 等。

Hosei University Repository

(29) 厨川文夫著,「ベーオウルフ——附フィンズブルフの戦」, 解説,『厨川文夫著作集・上』, 金星堂, 1981年, 439頁にゲルマン人諸部族についての言及が見出される。

(30) Cf. Leake, J. A., *The Geats in Beowulf*, Madison, Milwaukee and London, the Univ. of Wisconsin Press, 1967.

(31) *Beowulf*, lines 1949-1962.

(32) *Beowulf*, ll. 902, 1072, 1088, 1141, 1145.

(33) タキトゥス,『ゲルマーニア』, 38～45。

(34) 上掲書, 45。

(35) カエサル,『ガリア戦記』, I-51。

(36) タキトゥス,「ゲルマーニア」, 39。

(37) Schwarz, E., *op. cit.*, p.159. しかしSchwarzはその根拠を示していない。例えばSiegfried Junghansは, アリオウィストスがスエービーのどの部族に属していたかについては全く不明としている。cf. S. Junghans, *Sweben-Alamannen und Rom*, Konrad Theiss Verlag, Stuttgart, 1986, p.140.

(38) カエサル,『ガリア戦記』, I-34, I-36。

(39) タキトゥス,「ゲルマーニア」, 42。

(40) 注 (26) を参照。

(41) Schwarz, E., *op. cit.*, p.157.

(42) 例えば, 長友氏はスペイン人に移住したスエービーをクァディーとしているが (長友栄三郎,「ゲルマンとローマ」, 創文社, 1976年, 213頁), W. Schmidtは, セムノーネースであるとしている (Schmidt, W. (hrsg.), *Geschichte der deutschen Sprache*, 5., überarbeitet und erweiterte Auflage, Volk und Wissen Volkseigener Verlag, Berlin, 1984, p. 52)。

(43) Ewig, E., *Die Merovinger und das Frankenreich*, Stuttgart, 1988, p.19.

(44) Gregorius de Tours, *Gregori Episcopi Turonensis historiarum libri* X, in *Monumenta Germaniae Historica, Scriptores rerum Merovingicarum*, Tom. 1, ed. Wilhelm Arndt, Hannover, 1885. Die lateinisch-deutsch Ausgabe von R. Buchner, 1959. 邦訳:「トゥールのグレゴリウス 歴史十巻 (フランク史) I」, 兼岩正夫, 寔幸夫訳註, 東海大学出版会, 1975年, 第2巻, 30。

(45) Krüger, B., *Die Germanen*, Band II, p.16には, Cassius Dio (77, 13,

Hosei University Repository

4）による言及について，また長友氏の『ゲルマンとローマ』，p.159には，Scriptores Historiae Augustae（Antonius Caracallus, X, 6）による言及について触れられている。またドプシュ著，野崎直治，石川操，中村宏訳，前掲書，117頁および267頁を参照。

(46) Schmidt, B., *Die Germanen*, Band Ⅱ, p.337.

(47) 長友栄三郎，前掲書，160-162頁。

(48) Schwarz, E., *op. cit.*, pp.168-171.

(49) 植村清之助，『西洋中世史の研究』，星野書店，1948年，16頁。

(50) ドプシュ著，野崎直治，石川操，中村宏訳，前掲書，267-275頁。

(51) Grimm, J und Grimm, W., *Deutsches Wörterbuch*, Band 1, Verlag von S. Hirzel, Leipzig, 1854, 'Allemann' の項を参照。本稿では当該部族名をアレマンネンとしているが，それは現代ドイツ語による言語分布地域の名称をもとにした表現であり，またE. SchwarzやW. Schmidtの表記に従ったものである。ローマ人の様々な文書によるラテン語表記は，alamanniであり，古期高地ドイツ語ではAlamannenで，一般的に，古期高地ドイツ語による表記が用いられる場合が多い。B. Schmidtは，部族名の正しい名称は恐らくはAlemannenであろうと述べている。Cf. Schmidt, B., *Die Germanen*, Band Ⅱ, p. 336, Die Alamannenの項。

(53) Junghans, S., *op. cit.*, 1986, p.12. また，Dahn, F., *Die Völkerwanderung*, Kaiser Verlag, Berlin, 1977. の内表紙の地図を参照。

(54) Schmidt, B., *Die Germanen*, Band Ⅱ, p.336.

(55) Junghans, S., *op. cit.*, p.12.

(56) Schwarz, E., *op. cit.*, pp.168-169. 長友氏，前掲書，159頁を参照。また，Hirt, H., *Etymologie der Neuhochdeutschen*, Unveränderter Nachdruck der 1921 erschienen zweiten, verbesserten und vermehrten Auflage, C. H. Beck'sche Verlagsbuchhandlung, München, 1968, p.377 ; J. Grimm und W. Grimm, *op. cit.*, 'Allemann' の項を参照。

(57) Junghans, S., *op. cit.*, p.13.

(58) Cf. Hirt, H., *op. cit.*, p.378.

(59) Cf. *ibid.*, p.383. Hirtは，VolksnamenのDative Plur. が地名に転じたとして，Bayern, Burgund, England, Jütland, Lombardei, Normandie, Ostfriesland, Rügen, Sachsen, Schwabenが，それぞれBajuvari, Burgunden, Angeln, Juten, Langobarden, Normannen, Friesen, Rügen,

Hosei University Repository

Sachsen, Schwabenに由来しているとしている。が，Hirtは，Bornholmのの Burgundenholmとの関係については，否定的である。

(60) Bach ; A., *Die Geschichte der Deutschen Sprache*, Achte Auflage, Quelle & Meyer, Heidelberg, 1965, pp. 102-103 ; Waterman, J. T., *A History of the German Language*, revised edition, University of Washington Press, Seattle and London, 1976, p.229.

(60) Junghans, S., *op. cit.*, pp. 11-14.

(61) トゥールのグレゴリウス，『フランク史』，第2巻，30。

（付記：本論文は2004年3月発行の拙著『西洋中世英語変遷史（Ⅰ）——英語の成立前史とゲルマン人諸部族』の中の一章に加筆し，そのテーマを発展させたものである）

Hosei University Repository

Suebi and Alemannen: The National Background of the Anglo-Saxon Kingdoms in the Early Middle Ages

Michio Iwaya

The origin of the English language can be traced to the Anglo-Saxons in Britain in the early Middle Ages. One of the most important historical events which led to the formation of the Anglo-Saxon kingdoms was the migration to Britain of several Germanic tribes, such as the Angles, Saxons and Jutes (and presumably also the Frisians) from the fifth century onwards. They gradually established their kingdoms, and in that process was forged the earliest form of the English language. Unfortunately, however, little is known about the process other than from the fragmentary descriptions in Beda's ecclesiastical writings. So in order to obtain an accurate image of the people who founded England and made English what it was, it is necessary to follow their historical traces before their migration to Britain. According to Tacitus, the Angles and some other Germanic tribes constituted a loosely knit tribal organization

Hosei University Repository

referred to as Suebi. And it is also known that during the period of the great Germanic migrations, Suebi were transformed into a single tribe, and on the other hand another Germanic tribe with a close connection with Suebi, Alemannen, emerged as a separate tribe. The aim of this paper is to survey the conjectures that have been made about the Suebi and Alemannen tribes, especially their origins and mutual relations. A deeper knowledge of these Germanic tribes would provide us with more clues to understanding the Anglo-Saxons.